

表一 11 縄文土器観察表(1)

※ 器目文様の記載は施文された方向とした。

器目番号	器種	計測値 (mm)				文様・縄文・調整	出土地点 器目番号	備考	器目番号
		口径	底径	器高	器厚				
第31図	1 深鉢	—	—	(60)	8	磨消帯が文様とする 縄文土器	研削調整	ST 2-F 3	
	2 深鉢	—	—	(90)	7	磨消帯が施文する 器目文	施文が施文、口縁多 量に施文	ST 2-F 3	
	3 深鉢	—	—	(58)	7	器目文の磨消帯が施文 する器目文	LR 施文の施文	ST 2-F 3	
	4 浅鉢	—	—	(102)	5~10		施文がLR 施文	ST 2-F 3	(底部研削調整)
	5 浅鉢	238	—	(70)	5-6.5	磨消帯の磨消帯が施文 する器目文	RL 施文の施文	ST 41-Y	RP156 (炭化物付着)
	6 深鉢	—	—	—	—		RL 施文の施文	ST 45-Y	RP99
	7 深鉢	—	100	(80)	8	施文	丁寧な研削調整	ST 45-Y	RP170 (底部研削調整)
	8 深鉢	403	—	(247)	8~20	器目文の磨消帯が施文 する器目文	施文が施文、LR 施文 施文に口縁施文	ST 45-Y	RP166
	9 深鉢	268	—	(164)	5.5~8	器目文による 口縁部に施文	LR 施文を施文	ST 34東壁外側	EU 76
	10 深鉢	—	124	(286)	10	器目文による 口縁部に施文	施文がLR 施文のLR 施文	ST 34東壁外側	EU 76 (底部上底)
第32図	11 深鉢	310	124	550	14	口縁部に磨消帯を施 す	施文がLR 施文の磨消 帯施文	ST 33-Y	EU 74 (底部やや上底)
	12 深鉢	285	—	(187)	6.5	口縁部に磨消帯を施 す	施文がLR 施文	ST 31-F 2	RP182
	13 深鉢	178	—	(130)	6	器目文による口縁部、磨 消帯施文	施文がLR 施文	ST 31-F 2	RP121
	14 深鉢	—	101	(150)	6~8		施文がLR 施文の磨消 帯施文	ST 38-E 66	(底部やや上底?)
	15 浅鉢	—	142	(115)	7~10		施文がLR 施文の磨消 帯施文	ST 38-Y	RP164 (根拠土器)
	16 深鉢	340	100	500	12	口縁部に磨消帯の磨 消帯を施す	施文がLR 施文	ST 38-北西外	EU 75 (単体)
	17 浅鉢	295	—	(150)	8	器目文の磨消帯が施文 する器目文	RL 施文の施文	ST 38-F 3	
	18 深鉢	390	106	446	14	器目文の磨消帯が施文 する器目文	施文・先施ともLR 施文	ST 38-南西外	EU 83 (底部上底調整)
	19 小形深鉢	93	52	(86)	6.5	器目文に口縁部を施 す	施文がLR 施文	ST 38-F 3	RP96
	20 深鉢	219	72	(226)	6	器目文の磨消帯が施文 する器目文	LR 施文の施文	ST 36-Y	RP167 (底部やや上底)
第33図	21 浅鉢	—	—	(210)	7~12	口縁部に磨消帯・研削調 整	施文がLR 施文	ST 36-Y	RP168 (根拠)
	22 深鉢	322	108	630	10	口縁部に施文面に 口縁部施文	施文がLR 施文、 施文・LR 施文	ST 36-Y	EU 72 (底部木炭痕)
	23 深鉢	315	—	(207)	6.5~8.5	口縁部に磨消帯による 施文	施文がLR 施文	ST 36-F 1	(根拠)
	24 深鉢	—	58	(123)	8~13		施文がLR 施文	ST 36-F 1	
	25 深鉢	—	183	(300)	8	器目文による口縁部	施文がLR 施文	ST 35中央	EU 73 (SK174)
	26 深鉢	—	139	(177)	6~9		施文がLR 施文	ST 35-F 1	(底部やや上底)
	27 浅鉢	—	83	(194)	7~8.5		施文がLR 施文 (口縁部施文)	ST 72内	EU 88
	28 深鉢	320	104	596	10	口唇部調整	施文がLR 施文、 LR 施文	ST 72内	EU 87 (本器上底調整)
	29 深鉢	207	73	263	5~7.5	本器施文面の手拭文・ 口唇部施文	施文・口縁部施文、 LR 施文	ST 72-F 8	(底部やや上底)
	30 深鉢	234	—	(129)	5	口唇部磨消帯文	施文に磨消帯の痕跡 (口・底) 施文	ST 50-EL 78	
第34図	31 深鉢	—	93	(165)	6~8		施文がLR 施文	ST 50-F 1	(底面から底部研削調 整)
	32 浅鉢	280	—	(230)	6	磨消帯の磨消帯が施文 する器目文	LR 施文の施文	ST 50-EP 6	
	33 深鉢	209	—	(150)	8	口縁部に施文面に 磨消帯を施す	施文がLR 施文	ST 74-F 8	(炭化物付着)
	34 浅鉢	207	—	(81)	5.5~7	無文	施文地に磨消帯や、口 唇部調整	ST 74-F 8	
	35 深鉢	205	—	(172)	6	磨消帯の磨消帯が施文 する器目文	施文がLR 施文	ST 74-F 8	
	36 深鉢	266	—	(169)	5~9	磨消帯の磨消帯が施文 する器目文	LR 施文の施文	ST 74-F 9	
	37 鉢	202	60	126	5~8	口唇部に磨消帯文	施文がLR 施文	SK166-F	RP199 (底部研削調整)
	38 深鉢 (239)	—	(223)	5	磨消帯の磨消帯が施文 する器目文	LR 施文の施文	ST 33-EP 8	RP200	
	39 深鉢	306	—	(269)	5~7	口唇部に磨消帯帯の 施文	施文がLR 施文の磨 消帯施文	SK 37-F 2	
	40 深鉢	339	—	(235)	8	磨消帯の磨消帯が施文 する器目文	施文・磨消帯ともLR 施文	SK 40-F 3	
第35図	41 深鉢	273	—	(167)	6~10	磨消帯の磨消帯が施文 する器目文	LR 施文の施文 器目文に口唇部調整	SK 40-F 3	
	42 深鉢	280	106	426	10	口唇部に調整	施文がLR 施文	ST 77内	EU 78 (底部やや上底)
	43 深鉢	—	—	(47)	7~10	磨消帯による器目文を 施す	施文がLR 施文の磨消 帯	ST 39-EP 1	
	44 深鉢	—	—	(55)	7	磨消帯が施文し磨消 帯の器目文	不明	ST 39-F 2	
	45 深鉢	—	—	(73)	7~9	磨消帯が文様を構成 する器目文	RL 施文の施文	SK161-F	
	46 深鉢	—	—	(137)	7~11	器目文の磨消帯が施文 する器目文	RL 施文の施文	SK161-F	
	47 深鉢	430	—	(166)	7~10	器目文の磨消帯の 器目文	LR 施文による施文	ST 42-F 1	
	48 深鉢	—	80	(190)	6.5	口唇部による口唇 部施文	LR 施文による磨消 帯施文	ST 43-EL 68	(底部上底)
	49 深鉢	310	83	208	5.5~7.5	口唇部に磨消帯を施 す	施文がLR 施文	ST 43-Y	
	50 浅鉢	—	—	(54)	5~11	磨消帯が口唇部の文様 とする	LR 施文の施文	ST 43-EL 68	(51と同じ一器体)
第36図	51 浅鉢	—	—	(42)	5~12	50:同じ	50:同じ	ST 43-Y	RP124 (50と同一器体)
	52 深鉢	—	—	(34)	7~10	不明	不明	ST 43-EP	
	53 深鉢	—	—	(170)	9	磨消帯の磨消帯が施文 する器目文	不明	ST 43-F 4	
	54 浅鉢	—	—	(103)	6~12	磨消帯の文様が口唇部 の器目文	LR 施文の施文	ST 43-F 4	
	55 深鉢	—	—	(105)	8	磨消帯が文様構成の 器目文	施文・口縁部ともLR 施 文	ST 43-F 2	
	56 浅鉢	—	—	(83)	7	口唇部による器目文	施文がLR 施文でLR 施文の施文	ST 43-F 2	
	57 深鉢	—	—	(78)	6~10	施文がS字状文様	不明	ST 43-F 2	
	58 深鉢	—	—	(106)	8	器目文の磨消帯が施文 する器目文	LR 施文の施文 (口縁部)	ST 43-F 2	
	59 深鉢	—	—	(37)	6	器目文の磨消帯が施文 する器目文	RL 施文の施文	ST 43-F 1	
	60 深鉢	—	—	(55)	8	施文がS字状文様	施文がLR 施文の磨消 帯	ST 43-F 1	
第37図	61 深鉢	—	—	(44)	7~9	磨消帯の磨消帯が施文 する器目文	RL 施文の施文	ST 43-F 1	
	62 深鉢	—	—	(46)	8	磨消帯の磨消帯が施文 する器目文	不明	ST 43-F 1	
	63 深鉢	—	—	(37)	9	不明	施文がLR 施文の磨消 帯施文	ST 43-F 1	
	64 深鉢	—	89	(257)	5~8		施文がLR 施文 (底部上底)	ST 86-Y	(根拠)
	65 深鉢	—	—	(73)	6~10	磨消帯が文様の基調	不明	ST 125-F 1	

表-12 縄文土器観察表(2)

※ 欄目文様の記載は施文された方向とした。

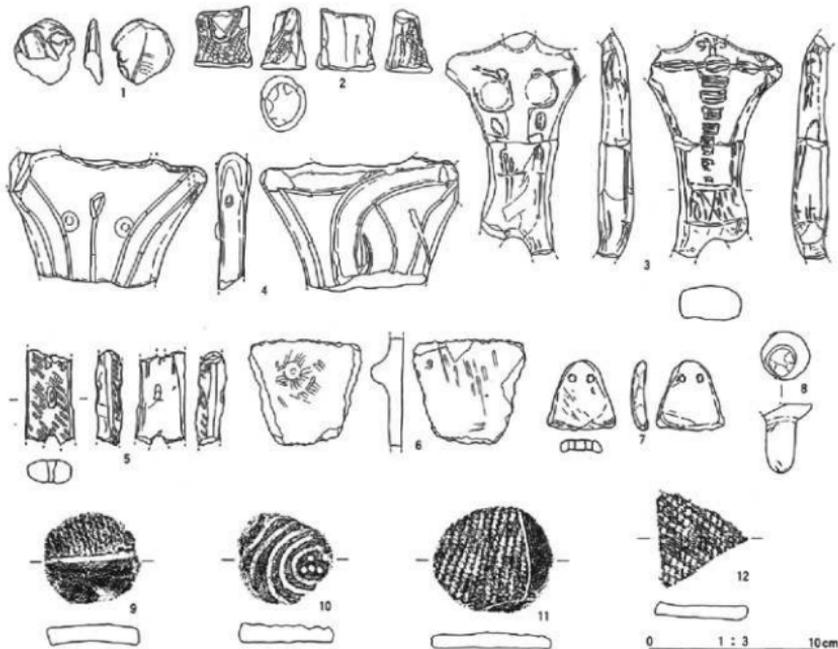
図号 番号	器種	計測値 (mm)				文様・縄文・調整	出土地点 登録番号	備考	国書 番号	
		口径	底径	器高	器厚					
第35図	* 66 深鉢	-	113	(281)	7~9.5		ST126内	EU79 (底部上部)	45	
	* 67 小形深鉢	-	63	(82)	8	[施文]	施文がLRL施文(底部にLRL施文) 施文がLRL施文の縁部のみ	SK126-F 1		
	* 68 深鉢	147	-	(135)	5~9	口縁部が磨消無文帯	施文がLRL施文、縦位 方向、口径多量4条	SK142-F 1		
	* 69 深鉢	262	-	(154)	7	口縁部が磨消無文帯	施文がLRL施文、縦位 方向	SK135-F		
	* 70 浅鉢	314	132	600	1.0	口縁部が縦帯帯に上 施文	施文がLRL施文 (底部に縦帯帯を調整)	SK130-Y	RP171を複製(調代用)	
	* 71 深鉢	-	114	(193)	5~7.5		施文がRL施文	ST80の北外	EU86 (底部やや上底)	
	* 72 深鉢	-	120	(112)	13		施文がLRL施文	ST104-F 8		
* 73 壺	82	39	110	5~7	平行線による高輪 施文	施文がRL施文	ST104-F 8	(底部上底)	45	
* 74 深鉢	-	-	(125)	6	磨消帯の縁部が縦帯、 横文文様を構成	施文・縁部ともLRL施文 区画内に四角文	ST165内	EU89	45	
* 75 深鉢	-	97	(134)	5~7		施文がLRL施文	ST44-F 2	(底部研磨調整)		
第37図	* 76 深鉢	247	-	302	8	磨消帯の縁部が縦帯、 縦文文様を構成	光暈・施文ともRL施文	ST110-EL124	RP201	45
	* 77 深鉢	271	-	(138)	6	磨消帯の縁部が縦帯、 縦文文様を構成	区内は磨消器具の光 暈が四角文	ST110-EL107		45
	* 78 深鉢	-	-	(160)	7	磨消帯の縁部が縦帯、 縦文文様を構成	施文がLRL施文 (口径多量4条)	ST104-EL123		45
	* 79 深鉢	257	-	(263)	6~10	磨消帯の縁部が縦帯、 縦文文様を構成	施文がLRL施文 高輪を構成	ST110-EL111	(複製)	45
	* 80 深鉢	-	68	(140)	6		施文・光暈ともLRL施文	ST110-F 10		45
	* 81 深鉢	-	67	(83)	9		施文がLRL施文	ST110-F 10	(底部研磨調整)	
	* 82 深鉢	-	95	(83)	6		施文がLRL施文	ST110北隅	RP172 (底部調整)	
* 83 小形深鉢	95	48	80	7	[施文]	縦帯部に施文が縦文 の縁部	ST110-F 10	(底部研磨調整)		
* 84 深鉢	279	67	268	8	片側区画の磨消帯が、 縦文文様を構成	施文・縁部ともLRL施文	ST110-Y	RP172 (底部やや上底)	45	
* 85 深鉢	284	90	448	8	片側区画の磨消帯が、 縦文文様を構成	施文がLRL施文、縁部LRL 施文、区画内に四角文	ST110-Y	RP178 (底部上底)	47	
* 86 深鉢	195	51	228	6.5	磨消帯の縁部が縦帯、 縦文文様を構成	施文がLRL施文	ST104-F 8		47	
第38図	* 87 深鉢	-	118	(500)	10	施文がLRL施文の縁部 施文	施文がLRL施文の縁部 施文	ST85-Y	RP174 (底部木敷痕)	47
	* 88 深鉢	-	93	(258)	7	磨消帯の縁部が縦帯、 縦文文様を構成	磨消帯状の磨消帯縦文	ST85-EL96	(複製・底部上底)	47
	* 89 深鉢	-	90	(155)	9		施文がLRL施文	ST85-F 2	(複製・底部研磨調整)	
	* 90 深鉢	-	95	(221)	8~11		施文がLRL施文	ST85-F 2	(底部研磨調整)	47
	* 91 深鉢	-	120	(110)	11	底辺部に研磨調整	施文がLRL施文の縁部 施文	ST85-Y	RP163 (底部上底)	
* 92 深鉢	400	-	(238)	4.5	口縁部が磨消無文帯	施文がLRL施文の縁部 施文	ST85-F 2		47	
* 93 深鉢	392	116	540	8~14	口縁部が縦帯帯の磨 消無文帯	区内にLRL施文縁部 施文、区画内に四角文	ST82内	EU97 (底部やや上底)	47	
* 94 深鉢	-	-	(162)	10		施文がLRL施文で縁 部施文	ST46-EL71	RP190 (複製)	48	
* 95 深鉢	-	114	(342)	8		施文がLRL施文 (口径多量4条)	ST95内	EU177 (複製)	48	
第39図	* 96 深鉢	-	-	(160)	6~8	片側区画の磨消帯が、 縦文文様を構成	施文がLRL施文 (口径多量4条)	ST84-EL106		45
	* 97 小形深鉢	91	-	(71)	5	片側区画の磨消帯が、 縦文文様を構成	施文がLRL施文	SK159-F 2	RP176	
	* 98 深鉢	-	-	(110)	8	片側区画の磨消帯が、 縦文文様を構成	RL施文の縁部	ST47-F 2		45
	* 99 浅鉢	-	-	(142)	6~12	文様構成8に同	RL施文の縁部	ST47-F 2		45
	* 100 深鉢	320	-	(444)	7	磨消による方形区画文	研磨調整	ST47-F 3	EU82 (住居内)	
	* 101 深鉢	-	107	(298)	7.5~10		施文がRL施文	21-22-23-Ⅳ	EU81 (複製)	
	* 102 深鉢	355	-	(291)	11		施文がLRL施文、他にRL (口径多量4条)施文を施す 研磨調整、縁の磨が みられる	SK121-F 2	(複製)	
* 103 深鉢	-	150	(143)	13		施文がLRL施文	ST47-F 3	(底部上底)		
第40図	* 104 深鉢	259	-	(179)	6.5~8	口唇部が磨消調整	施文がRL施文	ST89-F 7	(複製)	
	* 105 深鉢	330	-	(130)	9	磨消帯の縁部が縦帯、 縦文文様を構成	LRL施文の縁部	ST89-EL90	RP202a	48
	* 106 深鉢	-	93	(266)	5.5~8		施文がLRL施文 (口径多量4条)	ST89-EL91	RP203 (複製・底部やや上底)	48
	* 107 深鉢	-	68	(155)	6~10	磨消帯の縁部が縦帯、 縦文文様を構成	施文がLRL施文 (口径多量4条)	ST89-EL90	RP202b (底部やや上底)	48
	* 108 深鉢	196	-	(105)	6~9	磨消帯の縁部が縦帯、 縦文文様を構成	施文がLRL施文 (口径多量4条)	ST75-F 2		48
	* 109 深鉢	-	-	(348)	10~14		施文がLRL施文 (底部研磨調整)	ST75-F 2	(複製)	48
	* 110 深鉢	-	-	(210)	6.5~9	磨消帯の縁部が縦帯、 縦文文様を構成	施文・光暈ともLRL施文	ST76-F 24		48
* 111 深鉢	-	-	(240)	6~9	片側区画の磨消帯が、 縦文文様を構成	施文の光暈、F 面に磨消帯の縁部が 縦文文様を構成	ST76-EL88	RP196	48	
* 112 深鉢	268	71	252	7	磨消帯の縁部が縦帯、 縦文文様を構成	LRL施文の施文・縁部	ST76-EL94	(底部研磨調整)	48	
第41図	* 113 深鉢	-	(117)	(365)	8.5~11.5	磨消帯の縁部が縦帯、 縦文文様を構成	施文がLRL施文 高輪を構成	ST76南外	RP156 (単独埋設土器)	45
	* 114 浅鉢	-	-	(190)	9		施文がLRL施文	ST76-F 24	(複製)	49
	* 115 浅鉢	-	90	(89)	4~8	磨消帯の縁部が縦帯、 縦文文様を構成	施文がLRL施文の縁部 施文	ST76-F 24	(底部木敷痕)	
	* 116 浅鉢	-	94	(504)	8	磨消帯の縁部が縦帯、 縦文文様を構成	施文がLRL施文、縁部に LRL施文を施す	ST73内	EU90(複製)(底部上底)	
	* 117 深鉢	-	82	(65)	10		施文がLRL施文 (底部研磨調整)	ST73-Y	RP150 (複製・底部上底)	
	* 118 深鉢	-	73	(76)	6	磨消帯の縁部が縦帯、 縦文文様を構成	施文がLRL施文 (底部研磨調整)	ST73-EP	RP158	
	* 119 浅鉢	312	-	(235)	8	磨消帯の縁部が縦帯、 縦文文様を構成	RL施文の縁部	ST73-Y	RP159	49
* 120 深鉢	-	94	(310)	7	磨消帯の縁部が縦帯、 縦文文様を構成	施文・縁部ともLRL施文	ST81-EL115	RP156 (住居内外とも 木敷付)	49	
* 121 浅鉢	251	-	(202)	7.5	片側区画の磨消帯が、 縦文文様を構成	RL施文の縁部(下部に 施文がLRL施文を施す)	ST81-EL97	RP194		
第42図	* 122 深鉢	-	74	(200)	6		施文がLRL施文	ST128西外	EU85	
	* 123 深鉢	-	-	(55)	7	磨消帯の縁部が縦帯、 縦文文様を構成	LRL施文の縁部 (口径多量4条)	ST128-F 2		49
	* 124 深鉢	-	-	(72)	7	不明	施文がLRL施文、縦位 方向	ST128-F 2	(複製)	
	* 125 深鉢	248	87	315	9	磨消帯の縁部が縦帯、 縦文文様を構成	施文・縁部ともLRL施文	SK144-F	EU112	49
	* 126 浅鉢	-	-	(47)	6	磨消帯の縁部が縦帯、 縦文文様を構成	LRL施文の縁部	ST151-F 1	(底付物付着)	
	* 127 深鉢	-	-	(55)	7	不明	不明	ST151-F 1		49
	* 128 深鉢	320	-	(80)	5~8	口唇部研磨調整	施文がLRL施文	7-25-VII	EU96	49
* 129 深鉢	320	96	556	10	口唇部が片側区画の 磨消無文帯	施文がLRL施文、縦 位にLRL施文	ST36南西外	EU71 (底部調整)	49	
* 130 深鉢	-	117	(260)	8		施文がLRL施文の縁部 施文	EL171	RP204 (底部上底調整)		
* 131 深鉢	-	80	(320)	8		施文がLRL施文のLRL 施文	ST50北外	EU161	49	

(4) 土偶・土製品 (第43図、図版50)

山形西高敷地内遺跡の第IV次調査では、土偶や垂飾品などの土製品も少量出土している。これらはすべて住居跡や第IX層から出土しており、時期は縄文時代中期末葉に限定できる。

土偶は6点出土している。1は板状の土偶の頭部で、正面に細い沈線による眉・目・鼻が描出され、背面中央に縦方向の隆線を有する。2は土偶の脚部で、底部が上げ底になっており、正面に縄文とU字状の沈線が施されている。3は板状土偶の体部で、10m程離れた包含層間の接合資料である。胴上半は奴鳳のように腕を左右に広げ、肩や両腕のつけ根に2個1対の貫通孔、乳房に粘土塊を張り付け痕がある。胴下半はくびれて棒状になり、下端に足のつけ根がある。正面は両乳房から細い沈線が下垂する。背面は正中線と両腕に直交する部分が連続する方形区画沈線文で表現され、下腹から腰の部分には帯状の沈線文が施されている。4は逆三角形をした板状土偶の胴上半部で、肩や両腕のつけ根に2個1対の貫通孔、両乳房に粘土塊を張り付けている。正面は正中線が直線、脇部が弧状の沈線文で表現され、背面は幅広い隆帯と沈線による連弧文を有する。5は板状土偶の胴下半部で、胸部に2個の貫通孔、下部部に股の切り込みがあり、正面に縄文が施されている。6は板状土偶の胴上半部と思われるもので、粘土塊を張り付けた乳房が表現されている。

土製品には上部に2個の貫通孔をもつ略三角形の垂飾品(7)、キノコ状の土製品(8)がある。また円盤状土製品(9~11)が195個、三角状土製品(12)が4個出土している。



第43図 土偶・土製品実測図

## (5) 石器・石製品

石器の出土状況も、縄文土器と同じく住居跡や土壌内から出土したものが大半を占める。

### i 打製石器（第44～45図、図版51）

石材はほとんどが珪質頁岩で、玉髄と鉄石英が少量混じる。定型化された石器の器種としては①石鏃、②石錐、③石匙、④匏状石器、⑤搔器、⑥削器、⑦異形石器などがあり、このほか剥片の一部に部分的な二次調整や使用痕のあるものも認められる。石鏃は計8点出土している。基部の形態から、(a) 平面形が二等辺三角形状で基部に挟り込みがはいるもの（第44図6～8）、(b) 基部が丸みをおびて突出する円基鏃（同図1）、(c) 基部に茎をもつ有茎鏃（5）、(d) 基部・先端とも棒状のもの（2）、(e) 基部が欠損して形態が不明なもの（3・4）に細分できる。石錐は計5点出土している。基部の形態から、(a) 基部と長い尖頭部をもつもの（26・29）、(b) 細長い棒状のもの（28）、(c) 素材となる剥片の一端を尖がらせて短い尖頭部を作り出したもの（30）、(d) 基部が欠損して形態が不明なもの（27）に細分できる。

石匙は計14点出土している。つまみと刃部の位置関係から、(a) つまみを上方に置いたときに側縁が刃部となる縦形のもの（9・10・12）、(b) 縦形であるが幅広の形態となるもの（11・13～19・21・22）、(c) つまみを上方に置いたときに底縁が刃部となる横形のもの（25）に細分できる。匏状石器は計7点出土している。平面形や刃部の形態、加工部位などから、(a) 短冊形で刃部が両刃状となるもの（32～34・36・37）、(c) 撥形で刃部が両刃状となるもの（35・第45図38）に細分できる。

搔器は計5点出土している。刃部の位置と数などから、(a) 素材の側縁を除く三側縁が刃部となり得るもの（第44図24、第45図39）、(b) 素材の長軸先端部に刃部を作調整出したもの（第45図40・42）、(c) 有肩で下半部全体に丸い刃部を作出したもの（同41）に細分できる。削器は計21点出土している。形態、刃部の作出方法と位置関係などから、(a) 片面加工で、両側縁から先端に調整加工を施し、先端部が尖った形態となるもの（43～46）、(b) 片面加工で、両側縁から先端に調整加工を施し、先端部が丸みをもつもの（47～50）、(c) 主要剥離面の両側縁に調整加工を施し、刃部を作出するもの（23・31・51～53、57～60）、(d) 一側縁のみに調整加工が施されるもの（20・54～56）に細分できる。

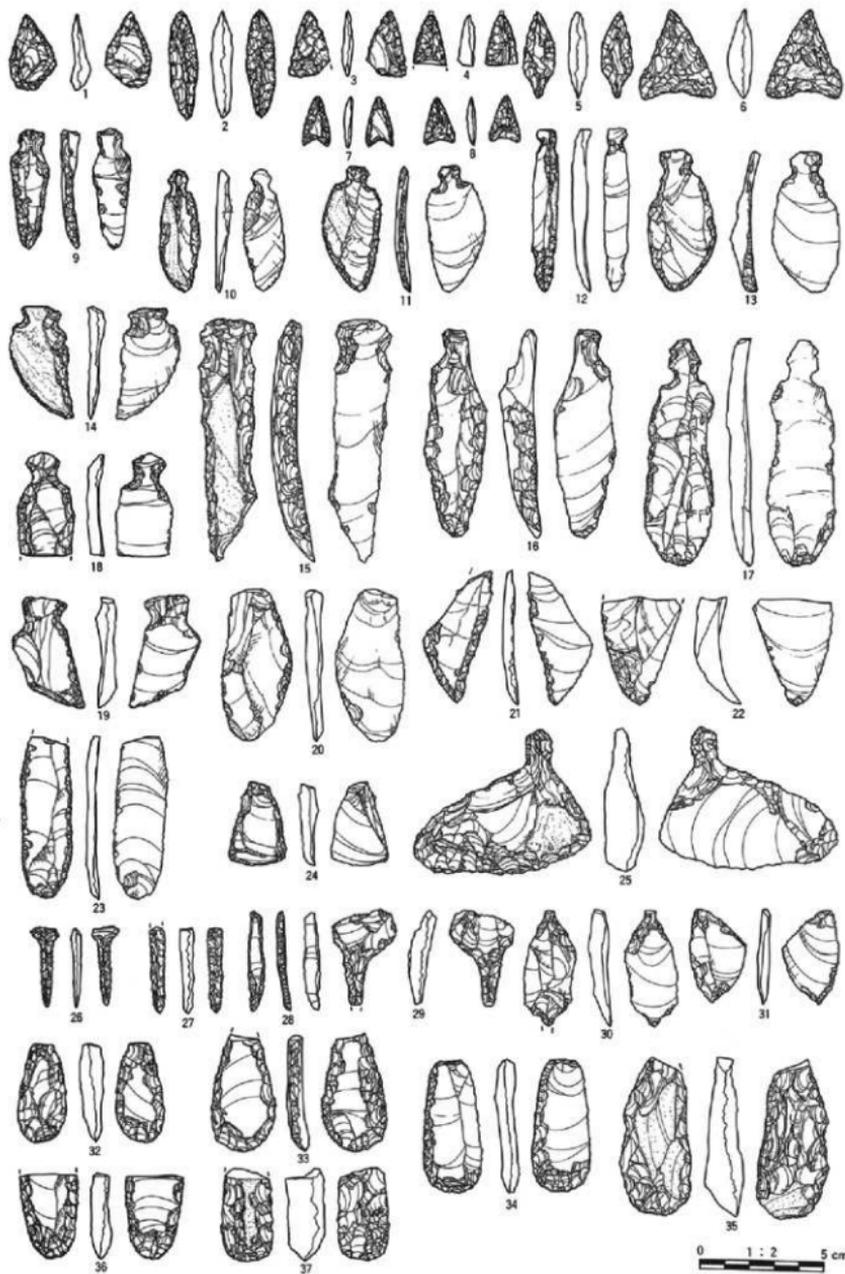
### ii 磨製石器（第46図、図版52）

磨製石器として分類したものには、⑧磨製石斧、⑨石皿、⑩磨石、⑪凹石などがある。

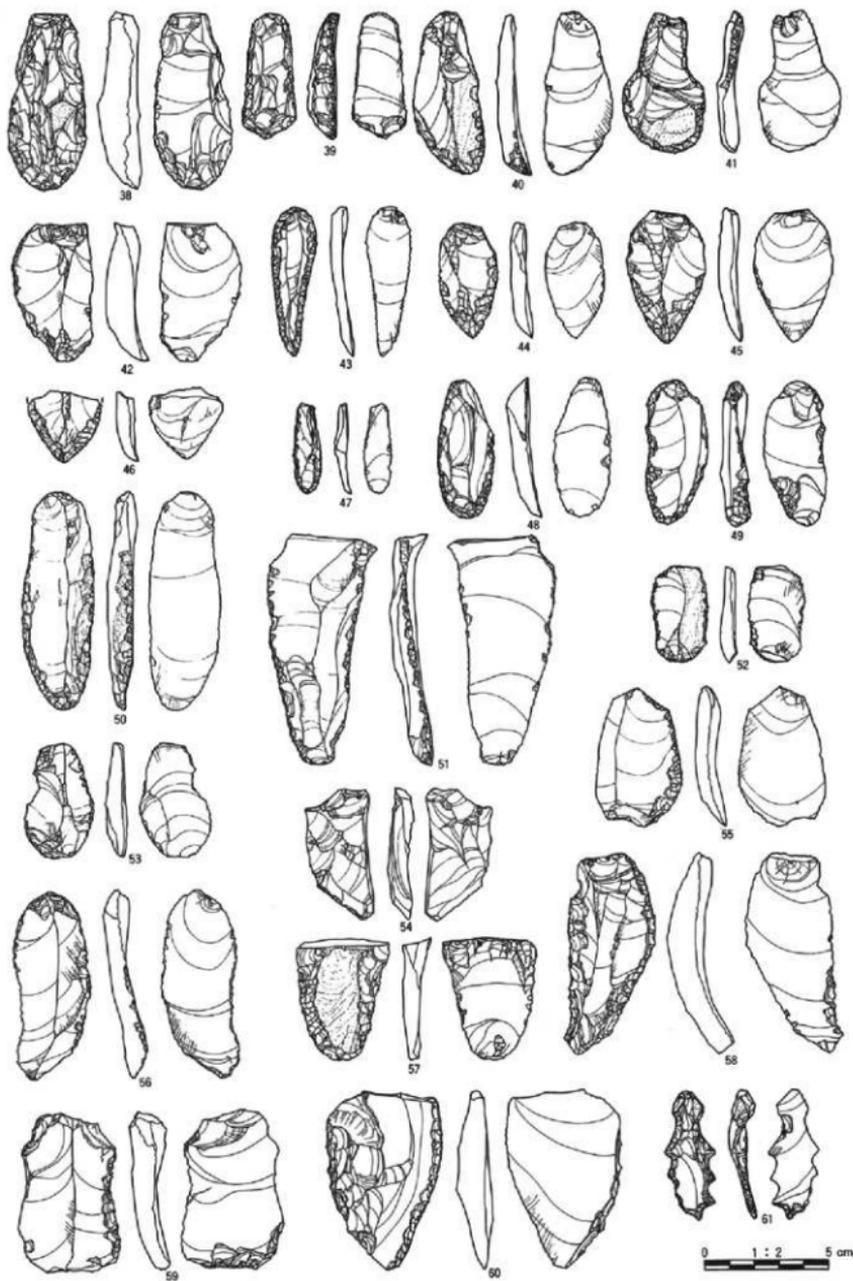
磨製石斧は計8点出土している。すべて両側面を面取りした定角石斧であるが、(a) 小型のもの（第46図3・4）、(b) 中型のもの（同図5～7）に細分できる。石皿は破片を含め9点出土している。扁平で大型の河原石の片面に円形ないし楕円形の窪んだ研磨面を有するもので、外面にも敲打痕がみられる（18）。磨石と凹石は計74点出土している。

### iii 石製品（第46図、図版52）

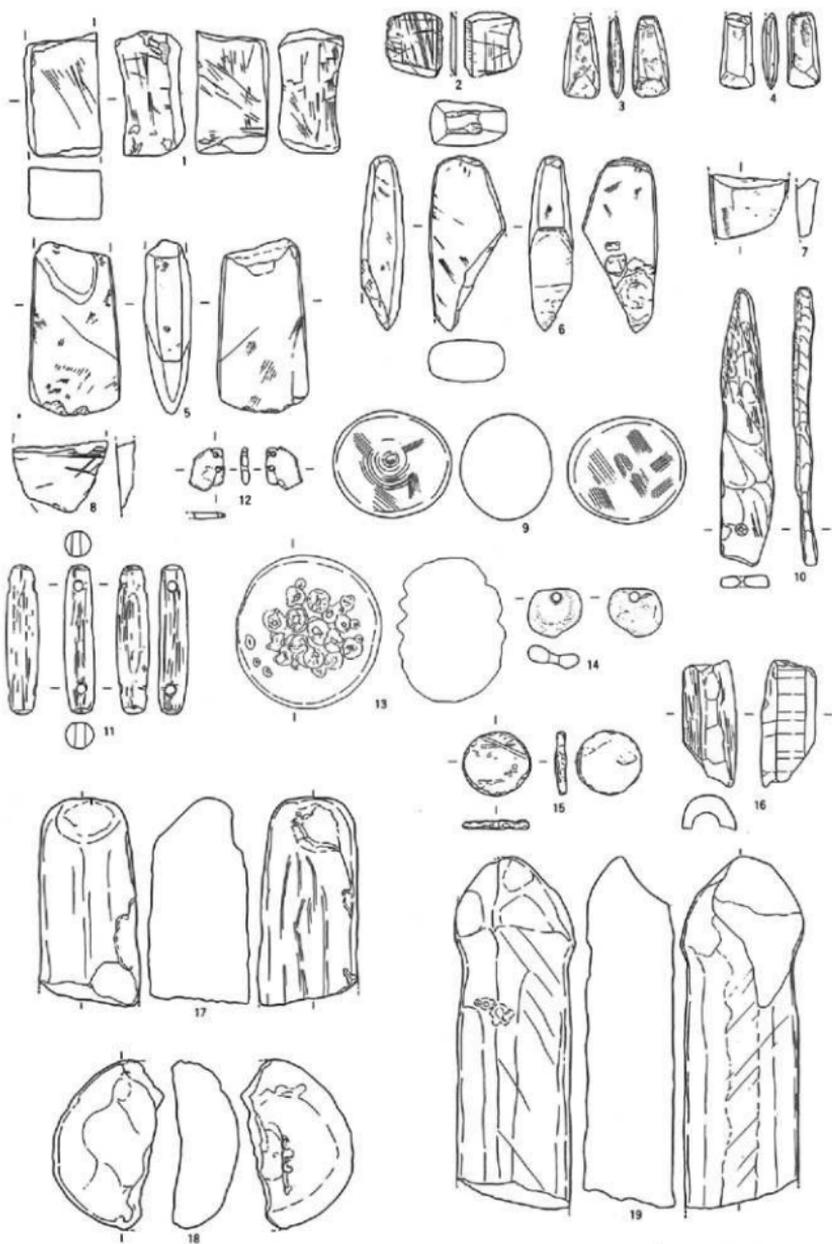
石製品として分類したものには、⑫石棒（19）、⑬有孔石製品（10～12・14・16）、⑭円盤状石製品（15）がある。10は扁平な石を面取りして、孔を両面から穿っている。



第44图 石器实测图(1)



第45图 石器实测图(2)



0 1 : 3 10cm

第46图 石器实测图(3)

表-13 打製石器計測表

No.	器種	出土地区	大きさ (mm)			重量 (g)	用途		打製	分層	探跡	図録
			長	幅	厚		正面	背面				
1	石 錐	ST-20K	30.5	16.0	5.3	2.1	線形部	線形部	打製	◎-a	44-1	31
2	石 錐	20-20K	43.0	11.5	8.1	3.9	全形部	全形部	打製	◎-d	2	31
3	石 錐	32-20K	25.8	15.3	3.3	1.3	全形部	線形部	打製	◎-e	3	31
4	石 錐	ST44-F3	18.0	12.5	5.6	1.5	全形部	全形部	打製	◎-e	4	
5	石 錐	ST46-F2	38.7	12.0	7.5	2.3	全形部	全形部	打製	◎-c	5	31
6	石 錐	ST31-F17	20.2	20.9	8.0	7.5	線形部	全形部	打製	◎-a	6	31
7	石 錐	ST46-F2	20.6	16.4	3.3	6.4	線形部	線形部	打製	◎-a	7	31
8	石 錐	ST36-F1	19.0	11.7	3.9	6.0	全形部	全形部	打製	◎-a	8	31
9	石 錐	20-20K	49.3	15.0	4.9	4.1	線形部	全形部	打製	◎-a	9	31
10	石 錐	ST36-F1	50.0	15.7	4.6	2.5	線形部	全形部	打製	◎-a	10	31
11	石 錐	SD30-F1	54.4	22.9	3.3	5.6	線形部	全形部	打製	◎-b	11	31
12	石 錐	ST10-EP	46.8	10.5	4.1	3.0	線形部	全形部	打製	◎-a	12	31
13	石 錐	11-24-20K	56.0	23.7	7.0	8.9	線形部	全形部	打製	◎-b	13	31
14	石 錐	31-20K	47.5	23.1	6.2	5.1	線形部	全形部	打製	◎-b	14	31
15	石 錐	SD22-F	86.0	21.7	8.3	27.6	線形部	全形部	打製	◎-b	15	31
16	石 錐	33-20K	43.7	23.3	14.3	12.3	線形部	全形部	打製	◎-b	16	31
17	石 錐	10-22-V	91.7	27.2	5.5	20.6	線形部	打製部	打製	◎-b	17	31
18	石 錐	27-22-V	112.8	27.2	5.5	6.9	線形部	全形部	打製	◎-b	18	31
19	石 錐	27-22-32K	48.3	22.6	6.9	7.5	線形部	線形部	打製	◎-b	19	31
20	石 錐	ST20-F3 SD13	61.5	27.2	6.0	8.9	線形部	線形部	打製	◎-d	20	31
21	石 錐	23-20K	51.2	21.2	4.4	5.3	線形部	線形部	打製	◎-b	21	31
22	石 錐	20-20K	141.0	30.9	9.5	13.4	線形部	線形部	打製	◎-b	22	31
23	石 錐	ST4-F1	61.2	16.9	3.4	6.9	線形部	線形部	打製	◎-e	23	31
24	石 錐	SD2-F	33.9	22.1	6.2	4.7	線形部	線形部	打製	◎-a	24	31
25	石 錐	ST60-20K3	51.4	21.4	12.6	45.1	線形部	全形部	打製	◎-c	25	31
26	石 錐	ST36-F2	31.1	18.1	3.9	9.1	全形部	全形部	打製	◎-a	26	31
27	石 錐	ST30-Y	104.1	6.0	5.0	1.6	全形部	全形部	打製	◎-d	27	31
28	石 錐	20-20- 31-20K	66.0	4.1	3.2	1.1	線形部	線形部	打製	◎-b	28	31
29	石 錐	23-20K	135.2	25.1	6.7	4.1	全形部	全形部	打製	◎-a	29	31
30	石 錐	ST10- EL60	107.1	16.7	8.2	6.1	全形部	全形部	打製	◎-c	30	31
31	石 錐	20-20K	37.1	22.5	4.0	3.1	線形部	線形部	打製	◎-c	31	31
32	石 錐	20-20K	30.5	18.6	4.7	7.3	線形部	線形部	打製	◎-a	32	31
33	石 錐	20-21K	146.6	25.4	6.5	11.5	線形部	線形部	打製	◎-a	33	31
34	石 錐	ST110-F30	82.5	23.3	7.1	13.3	線形部	線形部	打製	◎-a	34	31
35	石 錐	10-24K	104.8	23.6	16.1	26.4	線形部	線形部	打製	◎-b	35	31
36	石 錐	13-12K	131.8	22.6	5.9	7.8	線形部	線形部	打製	◎-a	36	31
37	石 錐	20-20K	121.4	19.3	14.4	12.6	線形部	全形部	打製	◎-a	37	31
38	石 錐	ST41-F2	36.1	31.3	14.0	36.6	線形部	線形部	打製	◎-b	38-39	31
39	石 錐	20-20- 31-20K	50.1	21.6	10.7	15.4	線形部	線形部	打製	◎-a	39	31
40	石 錐	ST4-Y	86.4	21.8	7.0	15.4	線形部	線形部	打製	◎-b	40	31
41	石 錐	ST2-F-EP2	35.0	33.0	6.0	18.1	線形部	線形部	打製	◎-c	41	31
42	石 錐	ST21-F2	50.2	21.1	12.0	22.0	線形部	線形部	打製	◎-a	42	31
43	石 錐	20-21K	61.9	17.4	4.5	6.0	線形部	線形部	打製	◎-a	43	31

No.	器種	出土地区	大きさ (mm)			重量 (g)	用途		打製	分層	探跡	図録
			長	幅	厚		正面	背面				
44	石 錐	ST38-EL61	47.3	23.4	6.0	7.3	線形部	線形部	打製	◎-a	44-45	31
45	石 錐	20-21K	56.2	21.0	6.0	11.7	線形部	線形部	打製	◎-a	45	31
46	石 錐	X-0	17.3	23.6	6.7	5.4	線形部	線形部	打製	◎-a	46	31
47	石 錐	20-F3	26.9	10.5	4.6	1.7	線形部	線形部	打製	◎-b	47	31
48	石 錐	ST31-F1	50.8	22.3	8.6	11.3	線形部	線形部	打製	◎-b	48	
49	石 錐	ST30-F2	58.6	23.6	5.6	14.3	線形部	線形部	打製	◎-b	49	
50	石 錐	20-20K	47.4	23.6	9.5	23.3	線形部	線形部	打製	◎-b	50	31
51	石 錐	21-20K	91.8	37.8	9.6	35.4	線形部	線形部	打製	◎-c	51	31
52	石 錐	ST17-F1	20.3	22.2	5.4	5.3	線形部	線形部	打製	◎-c	52	
53	石 錐	20-20K	45.9	27.7	7.2	5.0	線形部	線形部	打製	◎-c	53	31
54	石 錐	20-20K	52.3	24.1	7.8	12.2	線形部	線形部	打製	◎-d	54	31
55	石 錐	22-22K	57.3	24.1	7.0	17.8	線形部	線形部	打製	◎-d	55	31
56	石 錐	22-20K	77.4	22.8	8.6	17.0	線形部	線形部	打製	◎-d	56	31
57	石 錐	22-33K	48.7	37.6	11.1	18.1	線形部	打製部	打製	◎-c	57	31
58	石 錐	SD10-F1	64.2	36.8	14.2	65.7	線形部	線形部	打製	◎-c	58	
59	石 錐	20-24K	65.7	28.0	13.8	22.1	線形部	線形部	打製	◎-c	59	
60	石 錐	20-21K	72.4	48.4	12.9	38.2	線形部	線形部	打製	◎-e	60	
61	石 錐	ST104-F5	13.1	21.0	5.4	4.8	線形部	線形部	打製	◎	61	54

表-14 磨製石器・石製品計測表

No.	器種	出土地区	大きさ (mm)			重量 (g)	打製	分層	探跡	図録	
			長	幅	厚						
1	石 錐	ST7-F (中層)	79	43	30	182.4	打製	◎	46-1	52	
2	石 錐	ST36-F (中層)	20	34	3	6.9	打製	◎		3	
3	石 錐	SD22-F	49	22	9	18.3	打製	◎-a	3	52	
4	石 錐	ST41-EP6	45	23	10	17.9	打製	◎-a	4	52	
5	石 錐	ST38-F	106	50	25	262.7	打製	◎-b	5	52	
6	石 錐	ST43-EL65 (DF12)	106	45	25	252.8	打製	◎-b	6	52	
7	石 錐	24-20K	100	40	11	31.2	打製	◎-b	7	52	
8	石 錐	25-20V	42	58	12	18.0	打製	◎	8	52	
9	石 錐	ST7-F3	65	72	10	136.1	打製	◎	9	52	
10	石 錐	SK104-F	107	31	7	77.5	打製	◎	10	52	
11	石 錐	26-20K	61	47	19	38.2	打製	◎	11	52	
12	石 錐	ST30-F1	36	21	4	1.4	打製	◎	12	52	
13	石 錐	ST10-EL100	86	94	64	512.5	打製	◎	11	13	
14	石 錐	ST100-F8	29	32	19	16.4	打製	◎	13	14	
15	石 錐	ST38-Y	30	41	7	10.2	打製	◎	14	15	
16	石 錐	31-22K	77	20	11	37.5	打製	◎	13	16	
17	石 錐	ST38-F3	127	61	59	666.4	打製	◎	10	17	52
18	石 錐	ST39-EL65	180	68	35	173.8	打製	◎	9	18	52
19	石 錐	A-6 EU06	213	70	13	1,157.3	打製	◎	12	19	

## V 調査のまとめ

### 1 縄文時代中期末葉の土器変遷 (第47図)

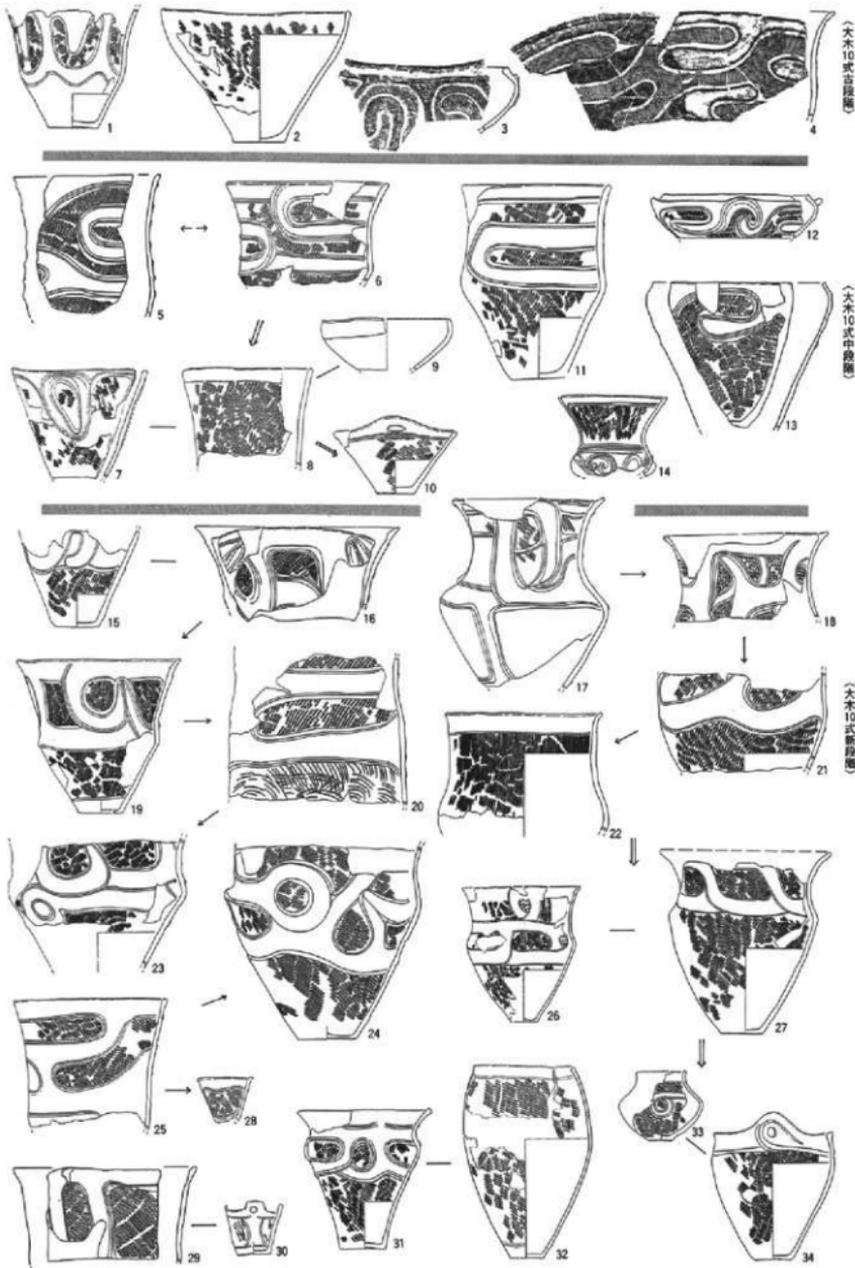
山形西高敷地内遺跡の下層の縄文土器は、多くが堅穴住居跡や土壌などの遺構から出土したもので、大略として縄文時代中期末葉大木10式期に属する。これらの土器は共存関係や遺構の重複・覆土の上下関係などにより、大木10式の「古段階」、「中段階」、「新段階」の三つの時期に類型化される。本節ではこれらの諸類型の内容を検討し、その分析過程で山形県内の他遺跡との比較や東北地方南部の大木10式土器との比較を行っていく。

三つの類型の時間前後関係は、ST43住居跡の土器群からほぼうかがえる。本住居跡の複式炉EL68の埋設土器 (第47図1) には「U」字状の磨消縄文が横位に連続して施されており、炉内や床面の浅鉢 (第35図50・51) にも「e」字状の磨消縄文がみられる。また覆土下部のF4からは「e」字状の浅鉢 (3) と波濤文 (4)、F2からは幅広い磨消縄文帯をもつ土器群 (第35図55~58)、F1からは稜の明確な隆帯をもつ土器群 (第35図59~62) や縦位の撫糸文 (門63) が出土している。炉内や床面・F4出土の土器群は大木10式期古段階の好資料であり、F2出土の土器群は大木10式期中段階、F1出土の土器群は大木10式期新段階と概括して大過ないと思われる。

つぎに大木10式期中段階の土器の変遷は、ST74・93住居跡の土器群が基準資料となる。兩住居跡の時期は重複関係からST74→ST93の順となるが、ST74住居跡F9出土の土器 (第44図6) とST93住居跡柱穴出土の土器 (同5) は雁又状の磨消縄文が横位に施される深鉢A2類で近似している。またST74住居跡のF8からは無文の浅鉢A類 (9) と隆帯によって区画される楕円文を有する深鉢D類 (7)・LR縄文の深鉢 (8) などが出土しており、層位的にはF8のものが新しい。さらにST93を切って構築されているSK166土壌からは波状口縁をもつ鉢形土器 (10) が出土している。10の帰属時期についてはなお検討を有するが、これら大木10式期中段階の1・2・3群と把握しておく。

このほかに大木10式期中段階に相当する土器としては、SK44土壌から雁又文をもつ深鉢 (11)、ST41住居跡床面から波濤文をもつ浅鉢 (12)、ST50住居跡柱穴から同じ波濤文をもつ深鉢 (13)、ST31住居跡F2から巴文をもつ深鉢 (14) が出土している。

最後に大木10式期新段階の土器の変遷は、ST100・104住居跡の土器群が基準資料となる。兩住居跡はほぼ同じ位置にあるが、重複関係からST100→ST104の順となり、さらに複式炉の構築順も参考になる。ST100住居跡の炉のうち床面下のEL124の埋設土器 (17) には胴上半部に隆帯による二分割の楕円文と「L」字状の文様、新しい方のEL107の埋設土器 (18) には隆帯による二分割の楕円文と波濤文が施されている。これら大木10式期新段階の1群と仮称する。また、ST104住居跡のうち古い方のEL123の埋設土器 (21) には横位の玉抱き文、新しい方のEL111の埋設土器 (22) には縦位の撫糸文、ST104住居跡の北壁よりの床面からは隆帯による玉抱き文と方形の区画文 (26) および沈線による連続方形区画文 (27) をもつ特徴のある深鉢が出土している。これら新段階の2群と仮称する。



（大木10式古様態）

（大木10式中様態）

（大木10式新様態）

第47図 縄文時代中期末葉の土器変遷図

さらにST104住居跡のF 8からは玉抱き文をもつ壺形土器(33)有孔突起をもつ深鉢(34)が出土している。これらを新段階の3群と仮称する。

大木10式期新段階の土器の変遷を補足するものとして、ST76・81・89住居跡の資料がある。各住居跡の構築時期は重複関係からST89→ST75→ST76→ST81の順となる。ST89住居跡のEL90からは隆帯による変形の「S」字状文をもつ深鉢(15)と隆帯による二分割および単独の楕円文をもつ深鉢(16)が出土している。これらはST100住居跡炉の新段階1群と類似する。次にST76住居跡の古い方の炉EL94の埋設土器(19)には隆帯による玉抱き文と方形区画文が、新しい方の炉EL88の埋設土器(20)には隆帯による楕円状の文様と、沈線による罫目状文が施されている。またST76住居跡のF24からは隆帯による楕円形の並列区画文と玉抱き文をもつ深鉢(23)が出土している。さらにST81住居跡の古い方の炉EL97の埋設土器(25)には隆帯による「C」字状文と波濤文、新しい方の炉EL115の埋設土器(24)には隆帯による玉抱き文が施されている。これらは先の新段階2群と共通性をもつ。SK159土壙はST81住居跡より新しいもので、隆帯による方形区画文をもつ小型深鉢(28)が出土している。これに類似した土器は、ST38住居跡のF3(29・30)やST36住居跡の床面(31・32)から出土している。29のような隆帯による頂部の突起と連続方形区画文を特徴とする土器を4群とする。

大木10式期古段階としたST43住居跡炉や床面・F4出土の土器群は、山形県内では米沢市大清水遺跡1号住居跡や同市花沢A遺跡27号住居跡(文献11)、長井市長者屋敷遺跡1号住居跡炉、山形市熊ノ前遺跡105・109号住居跡・20号炉(文献4)、東根市小林B遺跡4b号住居跡炉(文献2)、大蔵村白須賀遺跡などに類例が認められ、山形県内陸部に広く分布する。東北地方南部では宮城県大梁川遺跡の第Ⅱc~d層土器(文献14)がこれに類似し、内容的に豊富な点が参考になる。

大木10式期中段階としたST74・93住居跡出土の土器群のうち1群は、山形県内では長井市長者屋敷遺跡11号住居跡覆土、寒河江市うぐい沢遺跡26住居跡炉などに類例が認められる。山形市熊ノ前遺跡225号住居跡炉・24・25号炉の横位波濤文の土器もこの仲間に入るのであろう。遺跡数は多くないが山形県内陸部全体に分布する。東北地方南部では大梁川遺跡の第Ⅱa~b層土器がこれに類似し、同じく内容的に豊富な点が参考になる。

大木10式期新段階としたST100・104住居跡出土の土器群のうち1群は、山形県内では高島町台の畑遺跡2a号住居跡床面、村山市中村A遺跡2号住居跡覆土などに類例が認められる。2群は大江町橋上遺跡9号住居跡、村山市中村A遺跡2号住居跡炉(文献7)などに類例が認められる。3群の土器は大江町橋上遺跡(文献8)などから出土している。4群は飯豊町町下遺跡216号土壙、同町郡之上遺跡、大江町橋上遺跡6号住居跡、朝日村砂川A遺跡19号土壙などから出土している。新段階の土器は遺跡数も多く庄内を含む山形県全体に分布するが、東北地方南部では大梁川遺跡の第Ⅰ層土器や宮城県菅生田遺跡(文献6)の土器がこれに類似する。

縄文時代中期末葉の大木10式の細分については、丹羽茂氏がa~cの三分説(文献1)や

I～IV段階の四分説（文献12）を提示してきた。丹羽編年のうち第Ⅲ段階の基本資料としている宮城西ノ浜貝塚Aトレンチ第4層出土土器の位置付けについては、近年岩手県観音堂遺跡（文献10）や宮城県大梁川遺跡（文献14）の調査成果などから、大木10式期新段階における地域性との指摘がなされている。山形西高敷地内遺跡は大木10式という一型式の時期内に集落が営まれた稀な遺跡であるが、本遺跡の内ではほぼ連続的な土器の変遷を把握することが可能である。次にくる縄文時代後期初頭への移行はまだ明らかではないが、三十稲場式の刺突文を伴うこともある上記新段階4群の土器を中期最末から後期初頭に介在させることによって解決できそうである。

## 2 縄文時代中期末葉の遺構変遷（第48図）

縄文時代中期末葉の竪穴住居跡は第1・2次調査で10棟、第3次調査で1棟、第4次調査で48棟の計59棟が検出されている。これらはすべて時期が大木10式期の範疇で理解されるものであるが、本節では住居跡の時期をI～Ⅲ期に三区分してその変遷を概観する。

各住居跡のうちでもっとも古いものは4次調査ST43住居跡で、「U」字状の磨消縄文が横位に連続して施された深鉢や「e」字状の磨消縄文をもつ浅鉢が出土していることから、時期はI期（大木10式期古段階）と考えられる。この時期の明確な住居跡は1～3次調査にはなく、4次調査でもST72住居跡と、ST43住居跡に切られているST105住居跡の3棟が想定されるだけである。位置的には4次調査区の東から中央付近に分布する。

次いでⅡ期（大木10式期中段階）と考えられる住居跡には、1・2次調査のST3・10・110住居跡、3次調査のST9住居跡、4次調査のST31・33・34住居跡、ST50・72～74・93住居跡、ST2・41・101住居跡などがある。磨消縄文による雁又文や横位波濤文の施される深鉢や浅鉢を特徴とする中段階1群の住居跡がほとんどである。位置的には旧河川跡の南側と北側南寄りにまとまって分布する傾向がある。

最後にⅢ期（大木10式期新段階）と考えられる住居跡には、1・2次調査のST2・127住居跡、4次調査のST75・76・81・84住居跡、ST45・110・104・165住居跡、ST127～129住居跡、ST32・35・36・38・156住居跡などがある。位置的には旧河川跡の南側と北西寄りにまとまって分布する。

Ⅲ期の住居跡を詳しくみると、陸帯による二分割楕円文や波濤文の施される新段階1群の住居跡は、1・2次調査のST2・127住居跡、4次調査のST89・100住居跡などⅡ期（中段階1群）の住居跡に隣接して構築される傾向がある。また陸帯による玉抱き文や楕円形の連続区画文を特徴とする2群の住居跡は、4次調査のST76・81・84住居跡など旧河川跡の北側北寄りに多く分布する。さらに沈線による玉抱き文を主とする3群や陸帯による連続方形区画文を特徴とする4群の住居跡は、4次調査のST36・38住居跡、ST45・104住居跡など旧河川跡の北側西寄りにまとまって分布する傾向がある。

調査区を東西に流れる旧河川跡は、縄文時代中期末葉においておそらく河道となっており、住居跡は拡大する湿地を避けながら、川岸の自然堤防に繰り返し営まれたのであろう。

### 3 古墳～平安時代の遺構変遷 (第49図)

古墳時代の竪穴住居跡は第1・2次調査で4棟、第4次調査で3棟の計7棟が検出されている。各住居跡内から丸底の壺や坏・埴・器台などの土師器が出土していることから、時期は古墳時代前期、東南北半でいう「塩釜式」の古い段階、年代的には4世紀前半頃と推定される。いずれもカマドをもたず、うち2棟から地床炉が検出されている。ただし、旧河道を境にして住居跡の主軸方位が異なるようである。

奈良・平安時代の竪穴住居跡は部分的な検出を含め第1・2次調査で7棟、第3次調査で9棟、第4次調査で25棟の計41棟が検出されている。各住居跡のうちでもっとも古いものは4次調査ST11住居跡で、丸い天井部をもつ須恵器蓋などから奈良時代8世紀第1四半期頃に比定される。次いで1次調査ST11住居跡・3次調査ST7住居跡・4次調査ST14住居跡などが、丸底の土師器坏と底径が大きくケズリ調整を伴う須恵器坏類などから8世紀第2～3四半期頃に比定される。さらに3次調査ST1住居跡・4次調査のST7・13住居跡などが、ヘラ切りの須恵器坏と天井部にケズリ調整を伴う須恵器蓋、「く」字状の口縁をもつ土師器臺などから8世紀第4四半期～9世紀第1四半期頃に比定される。

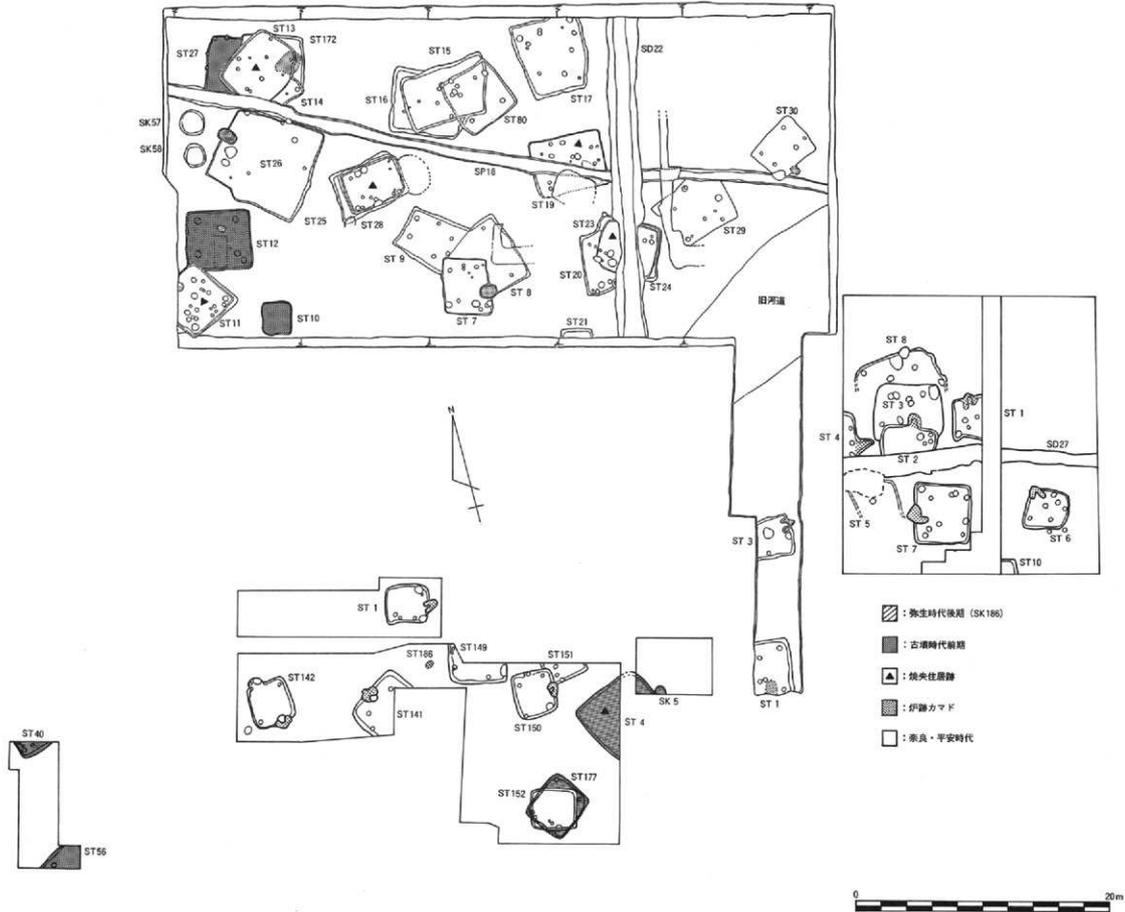
平安時代の住居跡としては4次調査ST1住居跡などがあり、回転糸切りの須恵器坏と須恵器蓋の形態などから、9世紀第2～3四半期頃に比定される。もっとも新しい住居跡は3次調査ST2・3住居跡などで、底径が小さい回転糸切りの須恵器坏とロクロ整形の赤焼土器坏の共伴などから9世紀第4四半期～10世紀第1四半期頃に比定される。

奈良・平安時代の竪穴住居跡は、時期が不明なものもあるが、8世紀初めから継続的に構築され、奈良時代末から平安時代初めにかけてもっとも数が多くなる。その後も9世紀第3四半期頃まで調査範囲内に広く分布し、9世紀第4四半期～10世紀第1四半期頃になると西側の限られた地域にしか分布しなくなり、10世紀第2四半期以降は消滅する。

#### (参考文献)

- (1) 丹羽 茂：『東北地方南部における中期縄文時代中・後葉土器部研究史の現段階』福島考古学12号 1971年
- (2) 山形県教育委員会：『小形遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第8集 1976年
- (3) 山形県教育委員会：『山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第17集 1979年
- (4) 山形県教育委員会：『熊ノ前遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第16集 1979年
- (5) 梅澤清一：『大木10式土師器』古代探査 1980年
- (6) 丹羽 茂他：『養生田遺跡』宮城県文化財報告書第92集 1982年
- (7) 山形県教育委員会：『中村A遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第73集 1983年
- (8) 大江山町教育委員会：『橋上遺跡発掘調査報告書』山形県大江山町埋蔵文化財調査報告書第1集 1984年
- (9) 山形県教育委員会：『山形西高敷地内遺跡第3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第91集 1985年
- (10) 中村良幸：『観音堂遺跡第1～6次発掘調査報告書』大迫町埋蔵文化財調査報告書第11集 1986年
- (11) 米沢市教育委員会：『花沢A遺跡』分布調査報告書第1集所収 米沢市埋蔵文化財調査報告書第23集 1988年
- (12) 丹羽 茂：『中期大木様式』縄文土器大観1 1989年
- (13) 山形県教育委員会：『山形西高敷地内遺跡第4次調査説明資料』1989年
- (14) 相原洋一他：『大梁川遺跡・小梁川遺跡』宮城県文化財調査報告書第126集 1990年





第49図 弥生～平安時代遺構配置図

图 版



調査開始前解体 (S ↑)



調査区全景 (E ↑)



粗掘作業 (N ↑)



上層重機掘削・面整理 (E ↑)



8~14-22G 土層断面 (NE ↑)



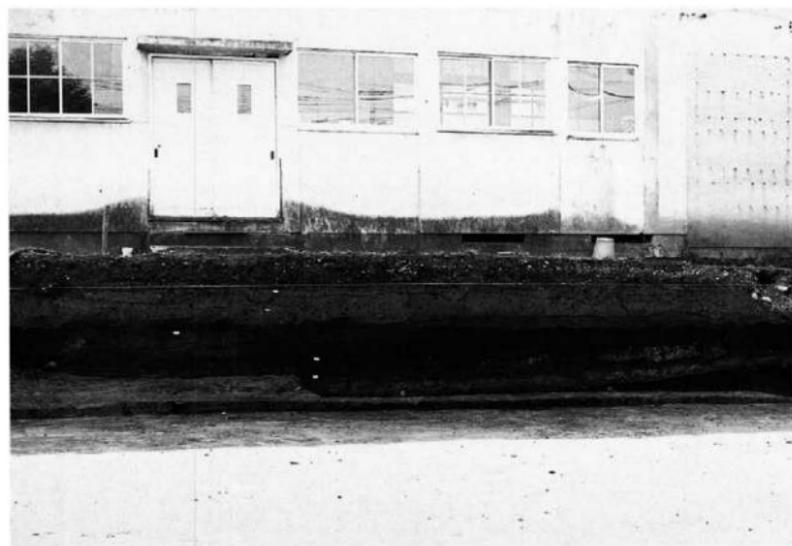
18~22-22G 土層断面 (N ↑)



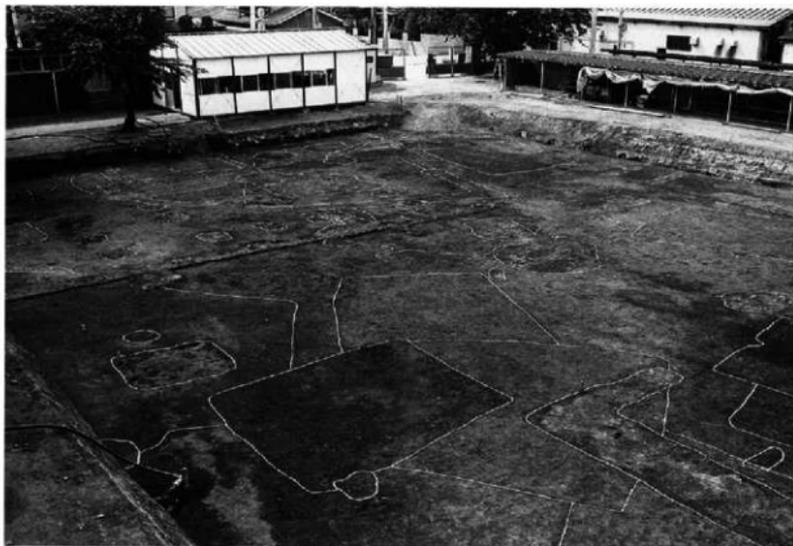
16~17-34G 土層断面 (S ↑)



38~29~33G 土層断面 (N ↑)



14~18-22G 土層断面 (N ↑)



上層遺構確認 (SE ↑)



上層遺構検出 (NW ↑)



ST 1・3全景 (S ↑)



EL53 (ST 1) 検出 (N ↑)



RP 1 (ST 1) 出土状況 (SE ↑)



ST 1全景 (NE ↑)



ST 3 全景 (NE ↑)



EL58 (ST 3) 検出 (W ↑)



ST 7 完掘 (S ↑)



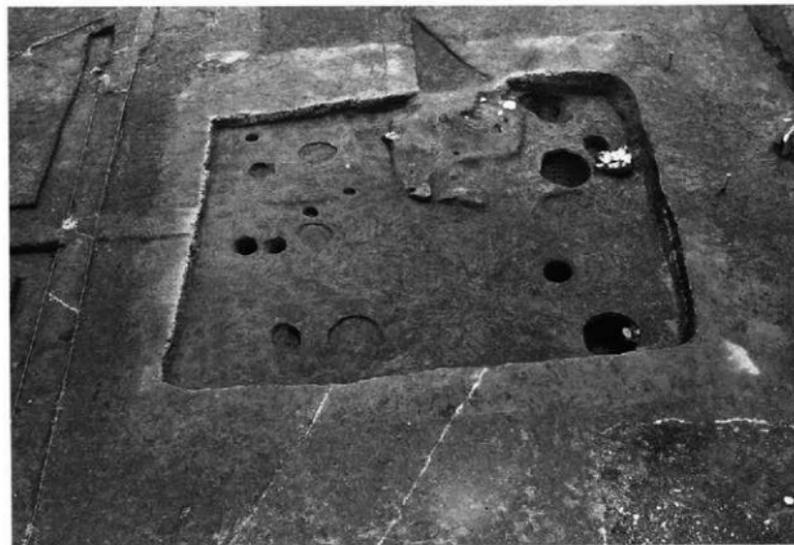
EL54 (ST 7) 検出 (W ↑)



EL54東西土層断面 (N ↑)



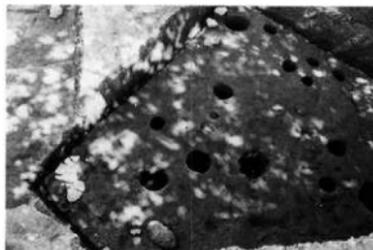
EL54南北土層断面 (W ↑)



ST 7 全景 (W ↑)



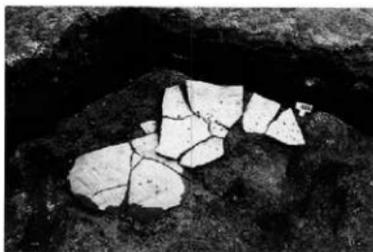
ST10全景 (N ↑)



ST11完掘 (SW ↑)



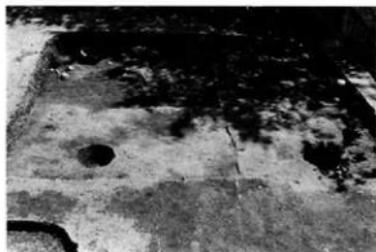
RP 8 (ST11) 出土状況 (SW ↑)



RP 9 (ST11) 出土状況 (S ↑)



ST11全景 (E ↑)



ST12完掘 (N↑)



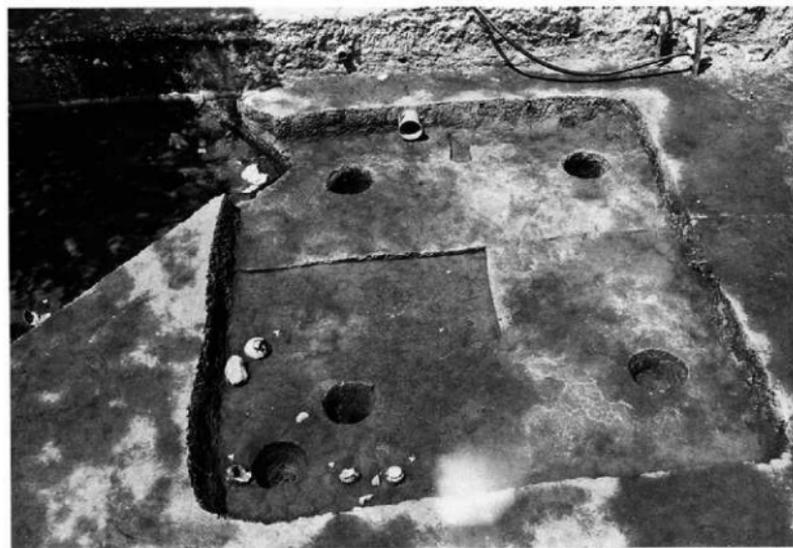
ST12土層断面 (S↑)



RP10 (ST12) 出土状況 (N↑)



RP12・13 (ST12) 出土状況 (NW↑)



ST12全景 (E↑)



ST13・14・27完掘 (N ↑)



ST13・SD18完掘 (E ↑)



RP17 (ST13) 出土状況 (W ↑)



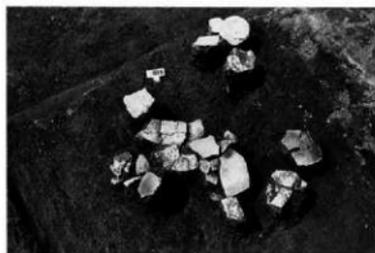
RP15・16 (ST13) 出土状況 (SW ↑)



EL59 (ST13) 検出 (W ↑)



RP19・20・21 (ST14) 出土状況 (W ↑)



RP18 (ST27) 出土状況 (NE ↑)



RP22 (ST27) 出土状況 (NE ↑)



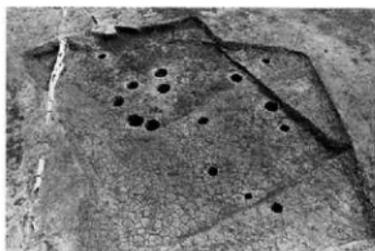
RP23・25 (ST27) 出土状況 (NE ↑)



ST13・14・27・SD18全景 (E ↑)



ST15・16全景 (S ↑)



ST15・16完掘 (W ↑)



ST17全景 (SW ↑)



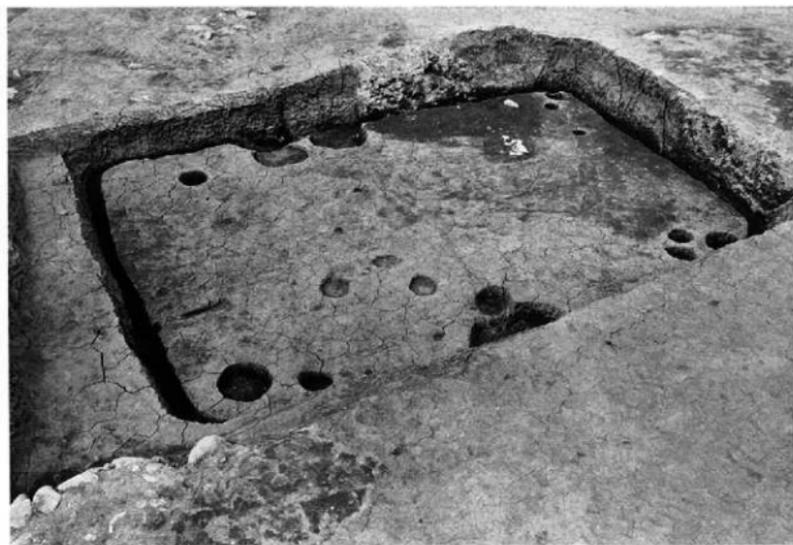
ST17土層断面 (N ↑)



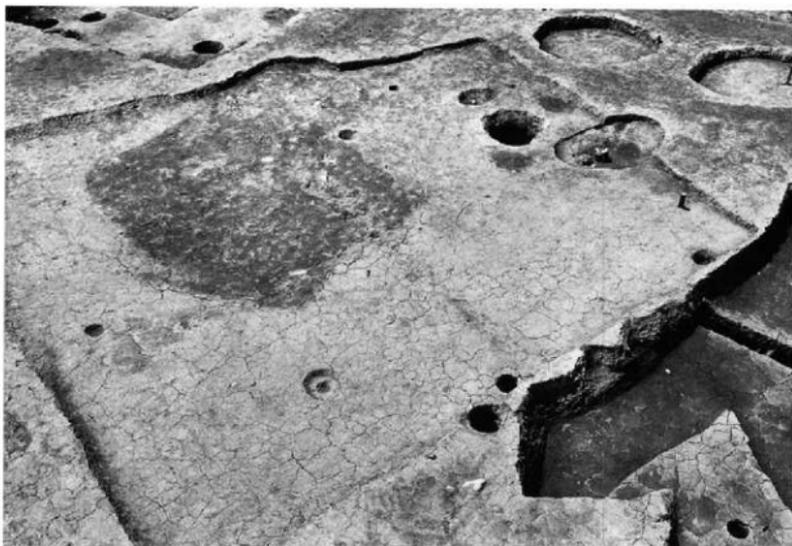
ST19・SD18全景 (W ↑)



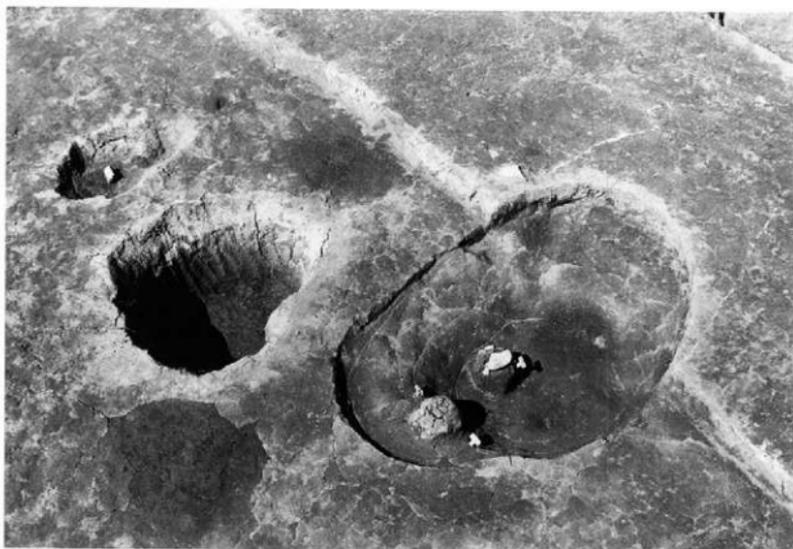
ST20・23・24全景 (NW ↑)



ST25・28全景 (S ↑)



ST26全景 (NE ↑)



EL60 (ST26) 完掘 (NE ↑)



ST25・28全景 (N ↑)



ST29全景 (S ↑)



ST30全景 (W ↑)



ST80全景 (S ↑)



ST80土層断面 (S ↑)



SK56・57全景 (N ↑)



SD22全景 (S ↑)



SD22 (25-22G) 土層断面 (NW ↑)



下層重機掘削 (EN ↑)



下層面整理作業 (W ↑)



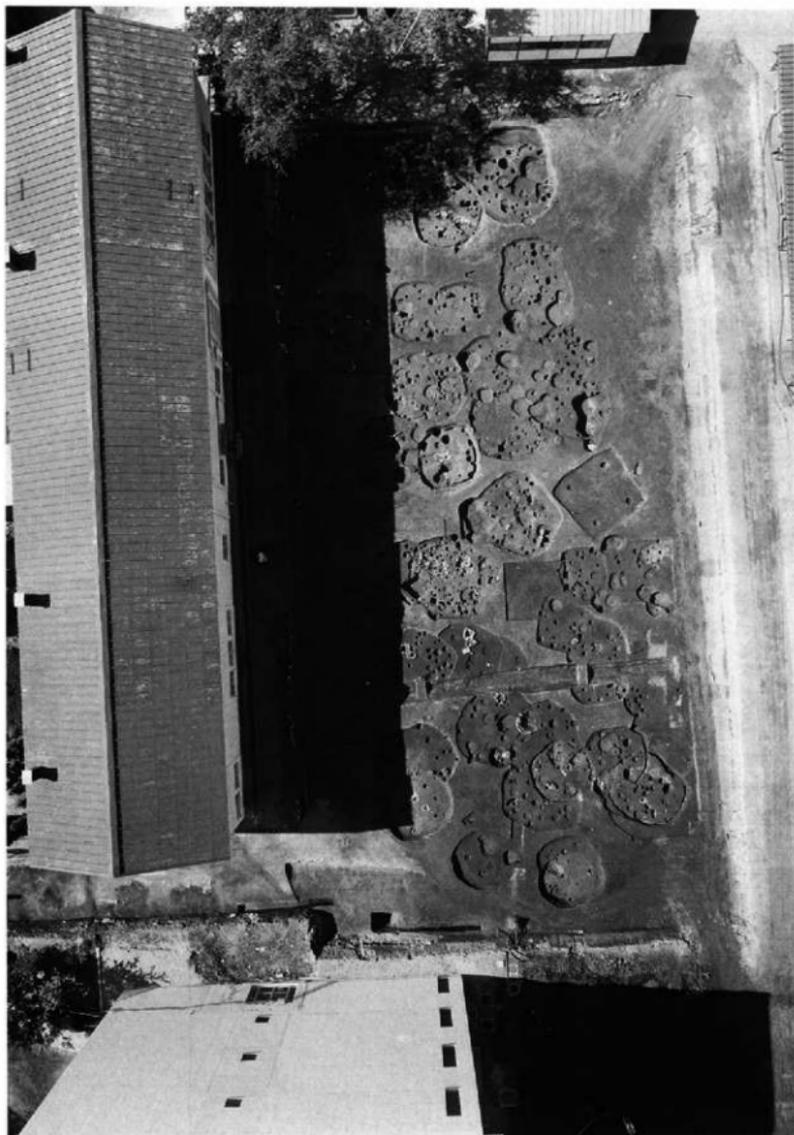
下層遺構検出作業 (NE ↑)



下層遺構確認 (W ↑)



下層遺構確認 (E ↑)



下層遺構群全景



調査区東全景 (E ↑)



調査区中央全景 (E ↑)



調査区西全景 (E ↑)



調査区南全景 (NE ↑)



調査区全景 (E ↑)



ST 2・101全景 (E ↑)



ST 2 土層断面 (E ↑)



ST41全景 (E ↑)



RP154 (ST41) 出土状況 (E ↑)



ST41土層断面 (E ↑)